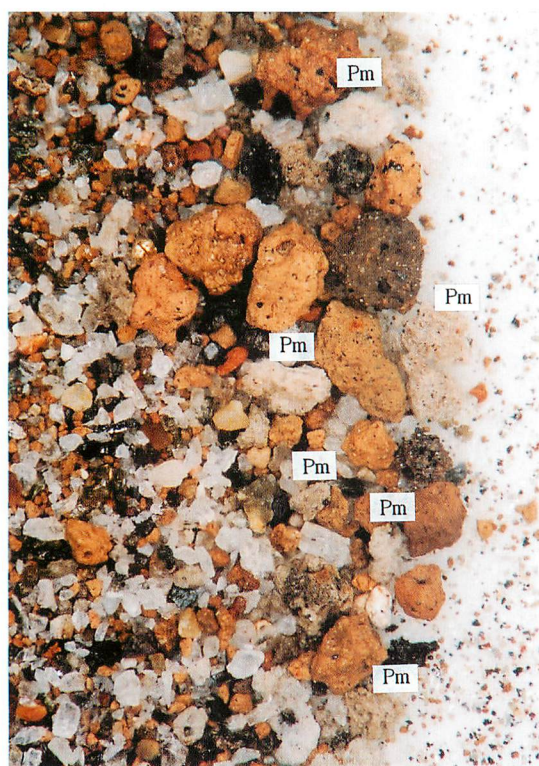




小田久保遺跡 2号住居跡 炉体土器(左) 出土土器2(右) 3(中央)

図版1 テフラ



1. As-B の軽石
江川南遺跡第17地点No 6

Pm: 軽石. Sc: スコリア.



2. 新期富士テフラノスコリア
江川南遺跡第17地点No15

2 mm

(株)東京航業研究所、(有)文化財 COM

6. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。特に、大井氏館跡遺跡第14地点の調査にあたっては富士見市教育委員会ならびに同市作業員の方々に多大な協力を頂いた。また、江川南遺跡第19地点の調査にあたっては上福岡市教育委員会ならびに同市作業員の方々に多大な協力を頂いた。記して厚く感謝の意を表したい。

〈発掘調査参加者〉(敬称略)

新井和枝、飯塚泰子、井上晴江、内田潔、大曾根キク子、笠原英子、加藤智香子、金子君子、小林こずい、河野匠、河野格、酒井昭、佐久間ひろ子、篠崎忠三、鈴木英子、鈴木エミ子、鈴木勝弘、関田成美、高貝しず子、戸澤竹二、中嶋末子、野岡由紀子、林きぬ子、比嘉洋子、増沢勝実、村端和樹、若尾久美子、若林紀美代

(富士見市教育委員会) 飯田久子、上田寛、川上文明、佐々木真理子、島田仁、清水七枝、関根輝子、高野ナミ、塚本政勝、戸田美根子、富田茂夫、中川和弘、成田淑美、成田良一、羽田美代子、吉田信江

(上福岡市教育委員会) 長田弘毅、壺岐ヒサ子、井川弘、宇佐美弘澄、遠藤忠志、小田静夫、小野沢保孝、菊口繁子、西城満期子、鈴木ちい、滝沢久嘉、富寺佐代子、中村正、宮崎達夫、吉田寛

〈整理作業参加者〉(敬称略)

青山奈保美、石垣ゆき子、大久保明子、小林登喜江、須藤さち子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、福島雅子、山口妙子

凡 例

1. 本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。

(1) 縮尺は原則として

遺構配置図 1 : 300 遺構平面図・遺物出土状況図 1 : 60、1 : 30 炉などの詳細図 1 : 30
土器実測図 1 : 4 土器拓影図 1 : 3 石器実測図 1 : 3、2 : 3 銭 1 : 1

(2) 遺構断面図の水糸高は海拔高を示す。明記していないのは同図版中の前遺構の海拔高に同じ。

(3) 遺構図における screen-tone の指示、遺物出土状況のドットの指示。

攪乱  地山(ローム)  焼土 
土器 ● 石器★ 黒曜石・チャート▲ 礫○

(4) 土器実測図における screen-tone の指示。

地文縄文  撚糸文 

(5) 土器断面図は、「網目」が繊維含有、●が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。

2. 住居跡名は、遺跡内の通し番号にしている。

3. 本報告にかかる出土品及び記録図面・写真等は一括して大井町教育委員会生涯学習課に保管してある。

第2表 2002年度埋蔵文化財調査一覧表

	遺跡・地点名	申請地	面積(㎡)	原因	試掘期間	調査期間	備考
1	亀居遺跡第56地点	亀久保2-13-14	172	個人住宅	—	2002.11.5~11.21	教育委員会で本調査
2	鶴ヶ舞遺跡第6地点	鶴ヶ舞1-84	474	個人住宅	2002.9.10~9.13	—	試掘調査
3	江川南遺跡第16地点	東久保1街区	3,752	給油所	2002.9.24~10.4	—	試掘調査
4	江川南遺跡第17地点	東久保1街区20,22,23	474	土地区画整理	2002.10.29~11.11	—	試掘調査
5	亀久保堀跡遺跡第27地点	東久保31街区2,3画地	980	店舗	2002.6.10~6.11	—	試掘調査
6	東久保遺跡第50地点	東久保3-22	102	個人住宅	2002.9.24	—	試掘調査
7	東久保遺跡第51地点	東久保18-11画地	155	個人住宅	2002.12.3	—	試掘調査
8	東久保遺跡第52地点	東久保4街区3画地	64	個人住宅	2003.2.6~2.7	—	試掘調査
9	東久保西遺跡第15地点	東久保9街区3画地	225	個人住宅	2003.2.3~2.5	—	試掘調査
10	東久保南遺跡第27地点	東久保63街区1画地	610	共同住宅	2002.5.29~6.7	—	試掘調査
11	東久保南遺跡第28地点	東久保60街区3・4画地	322	共同住宅	2002.9.13~9.21	—	試掘調査
12	東久保南遺跡第29地点	東久保64街区1・4画地	736	駐車場	2003.3.17~3.20	—	試掘調査
13	西ノ原遺跡第122地点	大井苗間西ノ原99-1	165	個人住宅	—	2002.6.21~7.22	教育委員会で本調査
14	西ノ原遺跡第122地点	大井苗間西ノ原99-1	155	個人住宅	—	2002.6.21~7.22	教育委員会で本調査
15	西ノ原遺跡第122地点	大井苗間西ノ原99-1	132	個人住宅	—	2002.6.21~7.22	教育委員会で本調査
16	西ノ原遺跡第122地点	大井苗間西ノ原99-1	140	個人住宅	—	2002.6.21~7.22	教育委員会で本調査
17	西ノ原遺跡第123地点	大井・苗間19街区10画地	252	共同住宅	2002.9.3~9.9	—	試掘調査
18	西ノ原遺跡第124地点	苗間137-2	524	個人住宅	2002.10.2~10.6	2002.10.8~10.11	教育委員会で本調査
19	西ノ原遺跡第125地点	旭1-8-2	182	個人住宅	2003.2.14~2.19	—	試掘調査
20	中沢前遺跡第20地点	大井・苗間33 35-8-1	762	老人介護施設	2003.2.3~2.5	2003.4.7~6.3	試掘後、調査会で本調査
21	中沢前遺跡第24地点	大井・苗間30-5	185	個人住宅	2003.2.7~2.13	—	試掘調査
22	神明後遺跡第18地点	苗間304-1,303-6	672	分譲住宅	2002.5.15~5.25	2002.5.27~6.21	試掘後、調査会で本調査
23	神明後遺跡第19地点	苗間264-4	216	個人住宅	2002.9.18~20	—	試掘調査
24	神明後遺跡第20地点	苗間293-11	143	個人住宅	2003.1.14~1.15	—	試掘調査
25	神明後遺跡第21地点	苗間283-1	674	造成	2003.1.10~1.30	—	試掘調査
26	浄禅寺跡遺跡第22地点	苗間373-5,377-5・3・4,373-8	935	分譲住宅	2002.4.23~5.14	—	試掘調査
27	大井宿遺跡第7地点	大井・苗間37街区14画地	257	事務所	2002.4.15~4.16	—	試掘調査
28	大井宿遺跡第9地点	大井1-3-14,15	1,617	宅地造成	2003.2.26~4.3	2004.7.30~9.3	試掘後、調査会で本調査
29	大井氏館跡遺跡第14地点	大井・苗間129街区2画地	984	共同住宅	2002.5.22~6.6	2002.6.20~8.9	試掘後、調査会で本調査
30	大井氏館跡遺跡第15地点	大井・苗間126街区1画地	135	個人住宅	2002.7.24~8.2	—	試掘調査
31	大井氏館跡遺跡第16地点	大井2-242-1	677	個人住宅	2002.8.5~8.22	2002.8.23~9.5	教育委員会で本調査
32	大井氏館跡遺跡第17地点	大井1-11-9	50	道路	—	2002.11.19~12.2	教育委員会で本調査
33	大井氏館跡遺跡第18地点	大井・苗間80-6-9	476	個人住宅	2003.1.17~1.22	—	試掘調査、大井宿8地点を変更
34	本村遺跡第99地点	大井・苗間99-1	446	共同住宅	2002.6.19~21	2002.7.1~7.31	試掘後、調査会で本調査
35	本村遺跡第100地点	大井・苗間85街区7画地	463	分譲住宅	2002.8.20~8.26	—	試掘調査
36	本村遺跡第101地点	大井・苗間131-2	217	店舗併用住宅	2002.9.30~10.4	—	試掘調査
37	本村遺跡第102地点	大井・苗間101-7画地	1,264	共同住宅	2002.11.11~11.15	2002.12.11~2003.2.10	試掘後、調査会で本調査
38	本村遺跡第103地点	大井143	237	個人住宅	2003.2.13~2.18	—	試掘調査
39	本村遺跡第113地点	東原52-22	1,051	駐車場	2002.8.22	—	試掘調査、地点を後付加
40	東台遺跡第39地点	大井626-8	100	個人住宅	2002.6.3~6.20	—	試掘調査
面積合計			21,181				

Ⅶ 江川南遺跡の調査

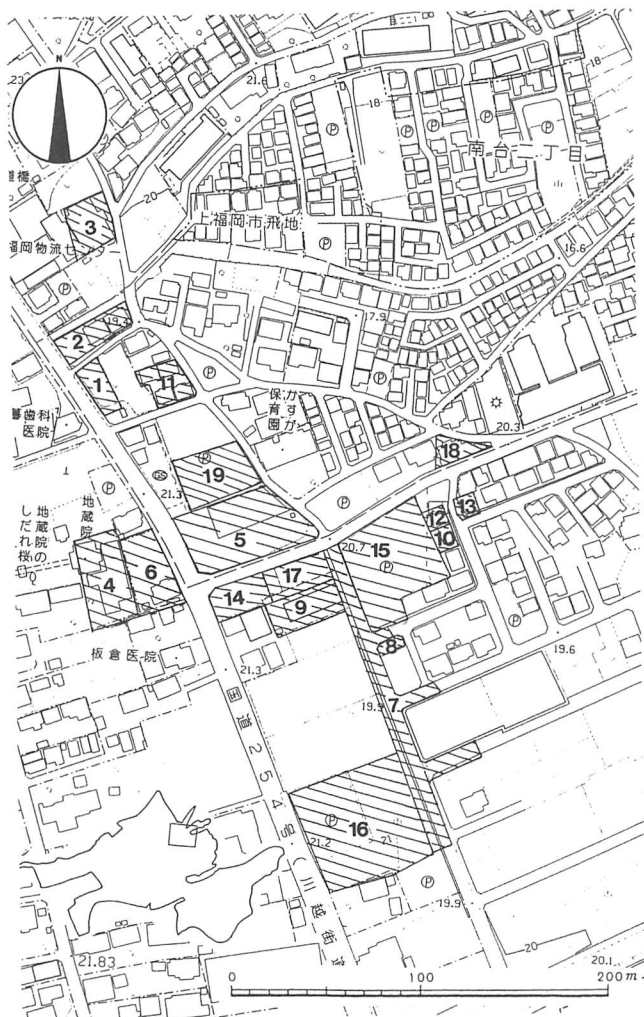
1 遺跡の概要

江川南遺跡は、入間川支流の新河岸川に注ぐ福岡江川の谷頭部から、約300～500m程下った右岸に位置している。

遺跡の標高は20～21mで、現谷底との比高差は約1～2mを測る。福岡江川北側の右岸は急傾斜を成すが、本遺跡をのせる南側右岸の台地は緩やかに傾斜する。

遺跡の中央部を南北に川越街道がはしり、川越街道から東に県道東大久保・大井線が延びる。主要道路が交叉し、東武東上線福岡駅から約1kmという立地条件のため、昭和40年代には個人住宅や工場などの急激な開発による市街化がなされ現在に至っている。

周辺の遺跡は、福岡江川の北西側対岸に縄文時代中期前葉の単一集落である亀居遺跡が位置し、同じく北側に鶴ヶ舞遺跡が位置する。東側約150mには、平安時代の遺物を出土する江川東遺跡と、同じく東側約50mに東久保遺跡が位置する。



第18図 江川南遺跡の地形と調査区 (1/4,000)

本遺跡は当初、地藏院遺跡と江川南遺跡とに分かれていたが、平成5年に遺跡の変更増補を行ない、江川南遺跡に統一した。なお、1985年に調査した地藏院遺跡第1地点は江川南遺跡第6地点に名称を変更した。また平成9年には亀久保堀跡遺跡と本遺跡を分けた。

本遺跡では旧石器時代の石器・礫群、縄文時代中期の住居跡、土坑等、古代～中世の堀跡、地藏院に関わる近世の遺構群等、遺跡の時期は多岐にわたる。

2 江川南遺跡第6地点

(1) 調査の概要

調査は店舗建設に伴うもので、原因者より2003年4月11日付けで「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は1985年に第6地点として調査済みであるが、1995年に隣接地の第4地点で縄文時代の住居跡を検出し、今回の調査区にも住居跡が延長していることが明らかとなったため、原因者と協議のうえ試掘調査を実施した。

調査は2003年4月16日から同年4月24日まで行なった。住居跡の想定区域に幅約1mのトレンチを設定し、重機により表土除去した結果、住居跡を確認し、遺構を掘り下げた。確認面までは50cmを測る写真撮影・遺構測量等記録保存を行ない、重機で埋め戻しをし、調査を終了した。

(2) 遺構と遺物

① 2号住居跡

【位置】調査区の西端に位置する。遺跡内では南端にあたる。本調査区では住居跡の東側約1/4を検出した。(「町内遺跡群Ⅵ」大井町教育委員会1997参照)

【形状】平面形態は楕円形を呈し、規模は5.0×4.2m、確認面からの深さは40cmを測る。炉は第4地点で検出しており石囲い炉である。床面は平坦で壁は緩やかに立上る。

【ピット】今回5基検出し、P1・2・5が主柱穴となる。

第9表 江川南遺跡2号住居跡ピット一覧表 (単位cm)

No	平面形態	確認面	底面	深さ	備考
3	半堀	43 ×	16 ×	11	
4	円形	25 × 25	15 × 13	18	
5	円形	36 × 28	8 × 8	75	柱穴
6	円形	22 × 18	10 × 6	23	
7	円形	28 × 22	12 × 10	13	

【出土遺物】縄文中期の土器片180点余りと石器が出土した。土器は第4地点で報告分と同様の傾向で細片

4 江川南遺跡第17地点の調査

(1) 調査の概要

調査は区画整理事業に伴うもので、原因者より2002年6月12日付で、「埋蔵文化財事前協議書」が町教育委員会に提出された。申請地は遺跡の北西部に位置するため、原因者と協議の結果、遺構確認の試掘調査を実施した。

試掘調査は2002年10月29日から同年11月11日まで行なった。幅約2mのトレンチ2本を設定し、重機で表土除去後、人力による表面精査を行なった結果、堀跡1条、溝2条とピット・土坑を検出した。確認面まで50～65cmを測る。遺構検出部分を重機で拡張し調査を継続した。写真撮影・遺構測量図作成等記録保存を行ない調査終了した。

(2) 遺構と遺物

【堀跡】調査区の北東に位置し、一連の堀跡と連なって東西方向にまっすぐ検出する。溝1・2と重なり、堀跡のほうが古い。

断面は逆台形を呈する。底はほぼ平坦だが、溝1・2と交差する部分で10～20cm高くなった部分が溝1・2の間隔とほぼ同じ長さ1.5～1.9mに渡ってある。高台部分を境に東側は底が平坦で、西側は凹凸がある。検出部の規模は長さ13.2m、上幅2.7m、下幅1.8m、深さは確認面から90cmを測る。出土遺物は縄文土器片が出土するが、当該時期に属する出土遺物は無い。

なお、覆土層のテフラ分析を行なったところ、平安時代の天仁元年（1108年）に浅間山より噴出したテフラ（As-B：新井、1979）を最上層に含むことから、平安末には埋没していた可能性が示唆されている。（「東久保の遺跡」大井町遺跡調査会2005参照）

【溝1】調査区の北東に位置し、南北方向に検出する。堀跡と重なり、堀跡埋没後に掘削され、溝のほうが新しい。70cm東側に溝2が並行する。掘返しがあり、東側に段差がある。断面は「U」字形で、検出部の規模は長さ7.2m、上幅27～70cm、下幅20cm、深さは確認面から30～40cmを測る。出土遺物は無い。

【溝2】溝1同様堀跡より新しく溝1と並行する。断面は「U」字形で、検出部の規模は長さ4.5m、上幅30cm、下幅20cm、深さは確認面から10～20cmを測る。出土遺物は無い。

【風倒木痕1】調査区西側に位置する。確認面の範囲は3.5×4.5m、中央部に設定した東西方向のトレンチ部分で深さ116cmを測る。

【ピット】出土遺物から時期は縄文時代。

第11表 江川南遺跡第17地点ピット一覧表 (単位cm)

No	平面形態	確認面		底面		深さ	備考
1	楕円形	64	× 45	30	× 20	21	
2	円形	42	× 40	18	× 15	60	
3	隅丸方形	100	× 80	75	× 60	20	旧 P11
4	円形	30	× 25	15	× 8	31	
5	円形	47	× 47	27	× 25	92	
6	楕円形	75	× 55	45	× 30	56	旧土坑 1

【出土遺物】

風倒木痕出土遺物 (1)

1は風倒木痕出土で、区画隆帯と裾部に幅広押引文を密に施文する勝坂Ⅱ式新相である。

ピット出土遺物 (2～9)

2～7はP2、8はP3（旧P11）の出土。

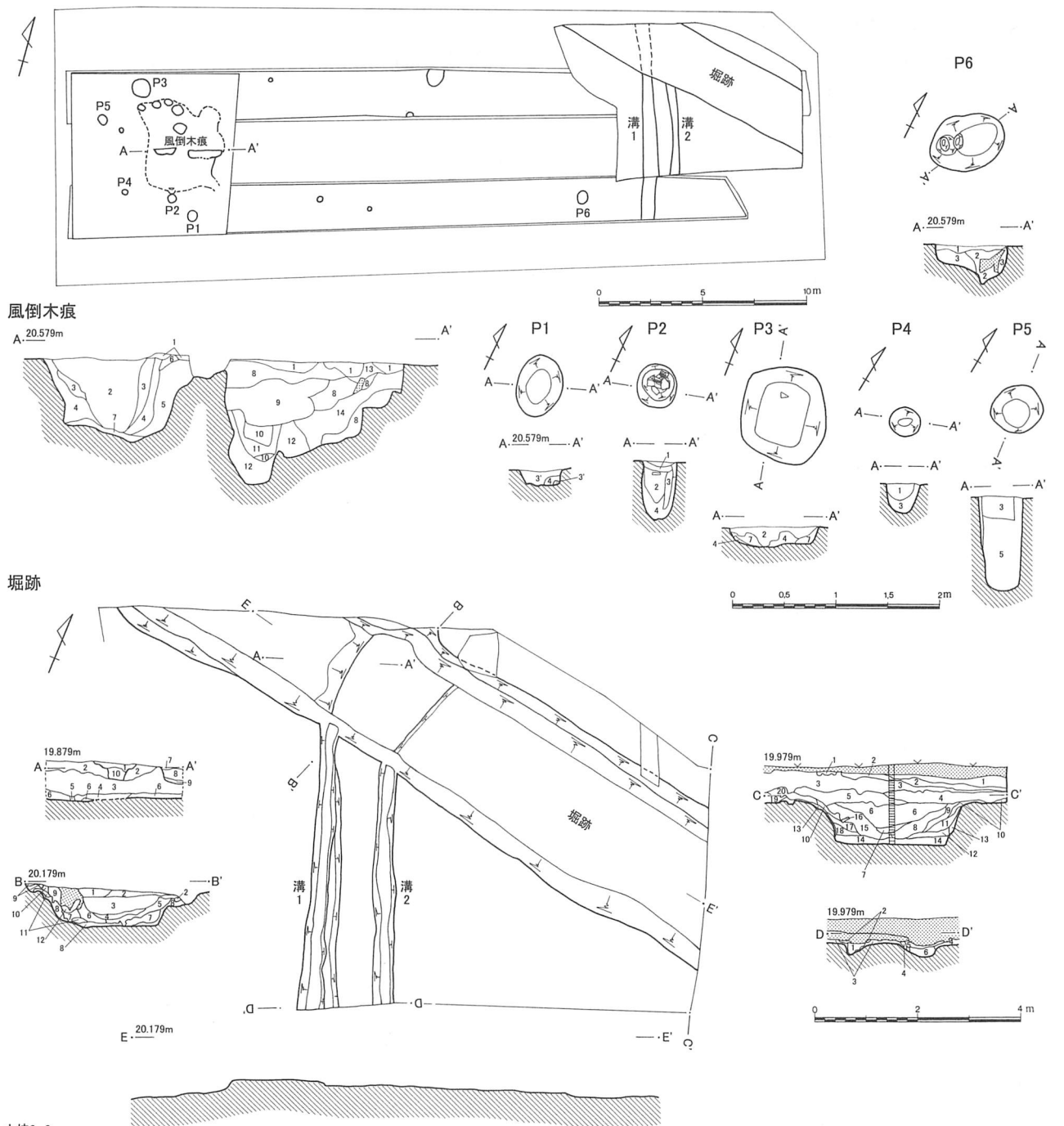
2～5は浅鉢の破片で、直接に接合しないが、胎土・施文・整形・焼成が共通しており同一個体と思われる。口縁部文様帯は、隆帯による長楕円形区画沿いと区画内に、複列の押引文を配する。器形はほぼ直立する口縁部と、大きく屈曲する無文の体部からなる。胎土には白色微砂粒と金雲母を多く含み、褐色砂粒と石英粉末を含み、焼成良好で黄褐色を呈するが野焼きによる黒斑も著しい。無文の体部には指頭圧痕がある。阿玉台Ⅱ式のうち古相である。6は底に近い。

7は筒形深鉢の胴中部の大形片である。縦長区画を半裁竹管や沈線で幾何学的文様をつくる。無文部の整形は筒形である。勝坂Ⅱ式に含まれる。

8は筒形深鉢の口縁部で、口唇と文様帯下部には太い隆帯上に幅広押引文を連続させ、波状隆帯にも刻目状幅広押引文を加える。胴下半部には地文の縄文が施文される。勝坂Ⅱ式（第Ⅳ様式）である。9は砂岩製打製石斧の残欠。

堀跡出土遺物 (10～34)

10と11は縄文地に結節沈線をもつ口縁部で五領ヶ台式。12は山形突起を持つ浅鉢の波頭部片で、外面に斜位の押引文、内面線沿いに押引文がある。13は顕著な指頭圧痕がある。14は爪状押引文と波状沈線がある。15～17は無文の胴下半部片。いずれも胎土に金雲母を含み、阿玉台Ⅱ式古相。18は複列の押引文をもち、19～25は幅広押引文を基調とし波状沈線をもつ。26は口縁と体部に縄文をもち、27～31は無文胴部片。31は竹管による沈線を伴う地文縄文の胴部片。33は硬砂岩製打製石斧の残欠。34はチャート製の長三角形石礫の完形品で重さ0.91g。



土坑2.3

- 1.茶褐色土 黒色土(多量)混入
- 2.灰黒色土 ローム粒 焼土粒(微量)混入
- 3.灰黒色土 茶褐色土 ローム粒(少量)混入
- 4.灰黒色土 茶褐色土(多量)混入
- 5.茶褐色土 黄茶褐色土(多量)混入
- 6.5層でやや明るい粘性
- 7.黄茶褐色土 ローム大ブロック(多量)混入
- 8.暗茶褐色土 ローム大ブロック(多量)混入
- 9.8層よりやや暗い、ボロボロ
- 10.暗茶褐色土粘性、ローム・ローム大ブロック(多量)混入
- 11.暗茶褐色土 粘性、ローム大ブロック(多量)混入、8層よりロームブロックは大きい
- 12.暗茶褐色土 ボロボロ
- 13.暗茶褐色土 ローム小ブロック・黒色土(少量)混入
- 14.茶褐色土 灰黒色土(多量)・黄茶褐色土・ローム粒(少量)混入

ピット1~5

- 1.黒褐色土 ローム粒(少量)混入
- 2.暗茶褐色土 一部軟質、ローム中ブロック・黒褐色土(微量)混入
- 3.暗茶褐色土 硬質、3'3層に炭化物粒(少量)混入
- 3'3'にローム粒(微量)混入
- 4.黄茶褐色土(やや暗色) 硬質、5.4層にローム小ブロック(少量)混入、やや硬質、
- 6.黄茶褐色土 ローム大ブロック(多量)・黒褐色土(少量)混入
- 7.暗茶褐色土 黄茶褐色土(多量)混入

ピット6

- 1.黄茶褐色土 黒褐色土(少量)混入
- 2.黄茶褐色土 やや硬質、ローム微小ブロック(微量)混入
- 3.黄茶褐色土 攪乱 軟質、黄茶褐色土に黒色土(少量)混入

堀跡 A-A'

- 1.やや灰色まじりの黒色土 硬変、ローム粒(微量)混入
- 2.黒色土 軟質、ローム粒(微量)と1層の土が(微量)混入
- 3.黒色土 軟質、ローム粒(多量)と茶褐色土(少量)混入
- 4.茶褐色土 軟質、ローム粒(多量)混入
- 5.黄茶褐色土 ローム粒(微量)混入
- 6.黄茶褐色土 硬質、粘性、ローム小・中ブロック(少量)、一部は(多量)混入
- 7.黄茶褐色土 軟質、黒褐色土(多量)混入
- 8.1層に砂利(微量)混入 硬質
- 9.2層でより硬質
- 10.1層でローム粒(少量)混入

堀跡 B-B'

- 1.黒褐色土 ロームブロック小・茶褐色土(少量)混入
- 2.黒褐色土 軟質、ローム粒(微量)混入
- 3.2層で一部硬質
- 4.黒褐色土 ローム粒(少量)混入
- 5.暗茶褐色土 一部ボロボロ、ローム粒・茶褐色土・火山灰粒子(少量)混入
- 6.暗茶褐色土 ボロボロ、火山灰粒子(少量)混入
- 7.暗茶褐色土 ボロボロ、黒褐色土、火山灰粒子(多量)混入
- 8.黄茶褐色土 硬質、粘性有、ロームブロック大(多量)混入
- 9.黒褐色土 黄茶褐色土(少量)混入
- 10.黄茶褐色土 硬質、
- 11.黄茶褐色土 軟質、
- 12.黄茶褐色土 黒褐色土(微量)混入

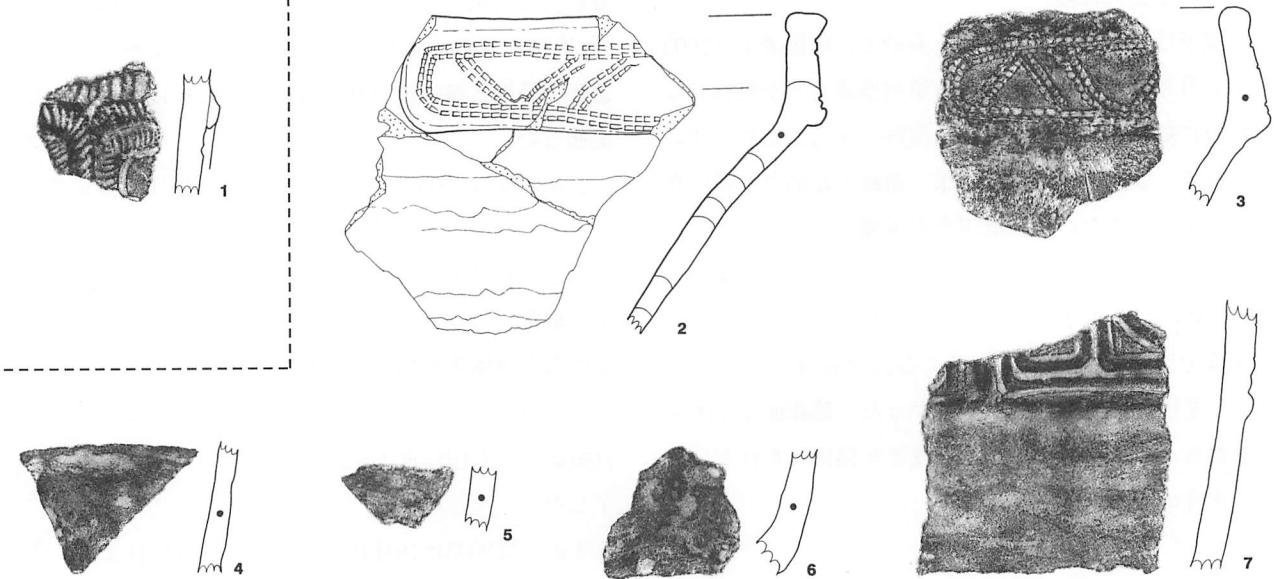
C-C'

- 1.攪乱層 硬質、ローム・ローム大・中ブロック・暗茶褐色土
- 2.暗茶褐色土 硬質、ローム粒・ローム微小・小ブロック(少量)混入
- 3.暗茶褐色土 軟質、ローム粒・焼土粒・ローム微小ブロック(微量)混入
- 4.暗茶褐色土 黒色土(多量)・ローム小ブロック・ローム粒(少量)混入、一部に小石を含む
- 5.暗茶褐色土 茶褐色土・ローム中・小ブロック(少量)・ローム粒(多量)混入
- 6.黒褐色土 やや軟質、ローム粒(少量)混入、ローム粒はやや大粒のものも含む
- 7.暗茶褐色土 ローム粒(微量)混入
- 8.7層よりローム粒を多く含む
- 9.暗茶褐色土 茶褐色土(少量)混入
- 10.黒色土 黄茶褐色土(少量、一部に多量)混入
- 11.茶褐色土 軟質、
- 12.茶褐色土に黄茶、小石(多量)混入、ボロボロ
- 13.茶褐色土 軟質、ローム(微量)混入
- 14.小石混じりの茶褐色土 ボロボロ、ローム大ブロック(多量)混入
- 15.6層でやや明るい
- 16.11層よりやや暗い 軟質、
- 17.茶褐色土 ローム粒(微量)・一部にローム中ブロック混入
- 18.17層よりローム粒・ローム中・小ブロック(多量)混入
- 19.黒褐色土 黄茶褐色土・ローム中ブロック(多量)混入
- 20.暗茶褐色土 軟質、ローム微小・小ブロック(多量)混入
- D-D'
- 1.黒褐色土 硬質、ローム粒・ローム微小・小ブロック(多量)混入
- 2.黒褐色土 ローム微小ブロック(少量)・炭化物粒(微量)混入
- 3.黒褐色土 黄茶褐色土(少量)混入
- 4.黒褐色土 ローム(多量)混入
- 5.黒褐色土 一部にローム大ブロック含む
- 6.暗茶褐色土 ローム大ブロック(少量)・ローム小ブロック(多量)混入

第21図 江川南遺跡第17地点遺構配置図(1/300)、土坑、ピット(1/60)、堀跡(1/120)

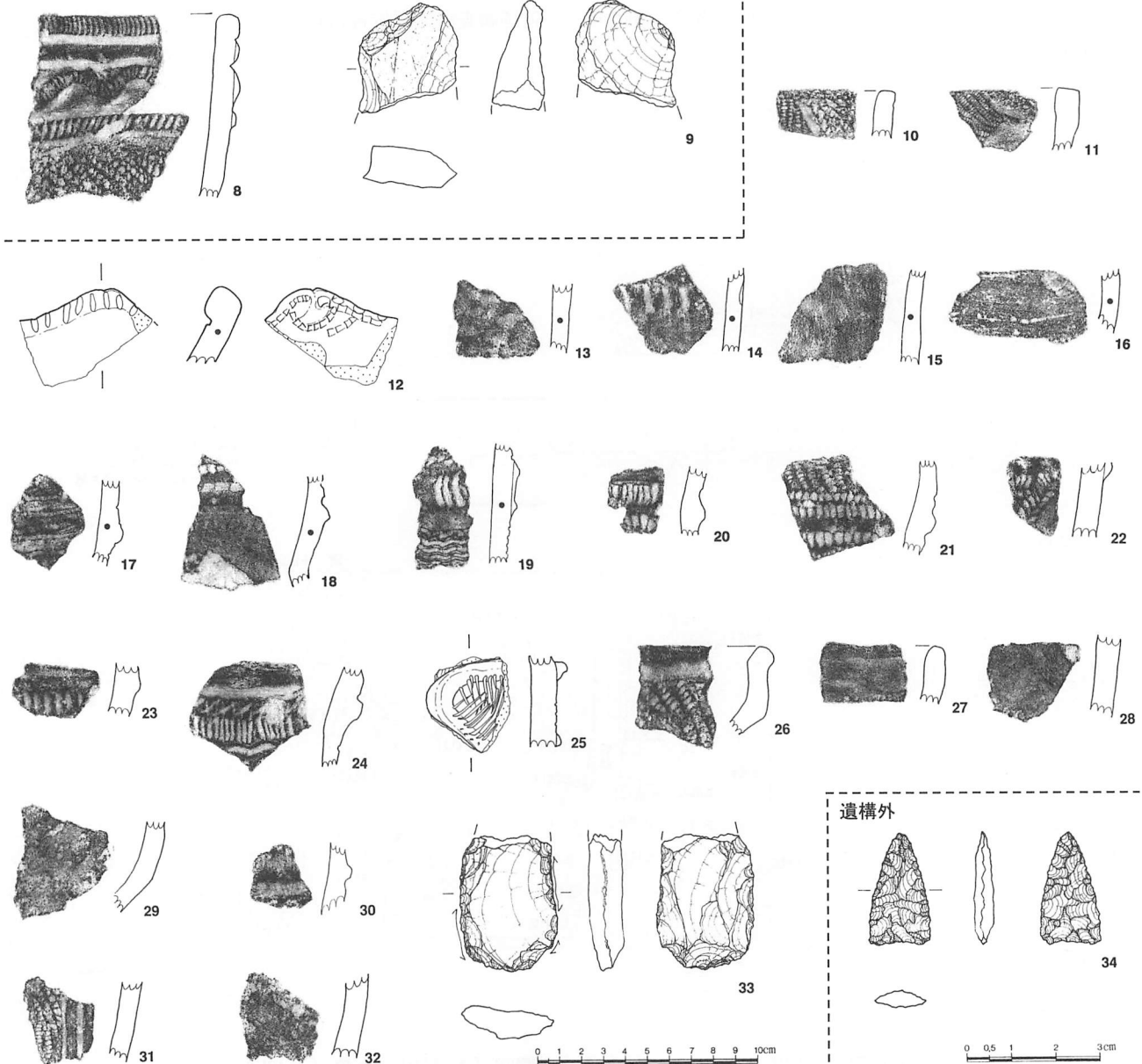
風倒木痕

P2

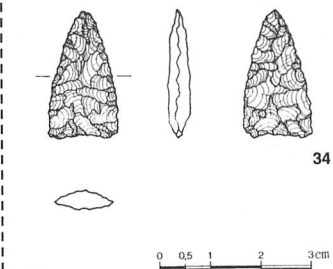


P3

堀



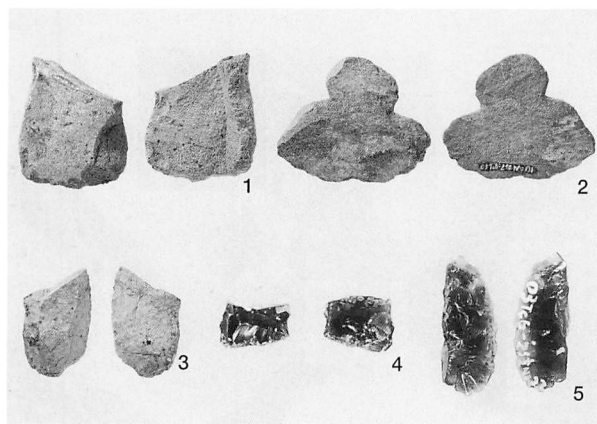
遺構外



第22図 江川南遺跡第17地点出土遺物 (1/3・2/3)



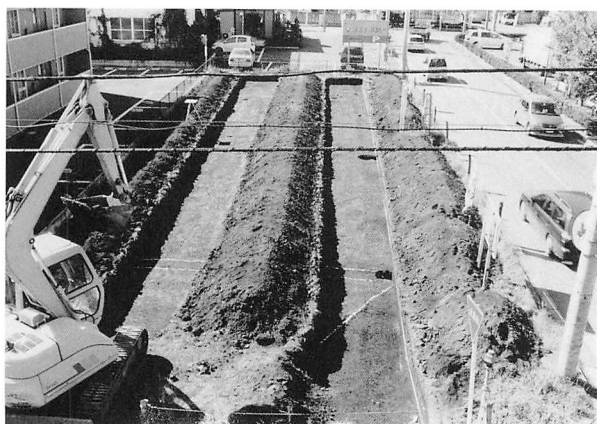
江川南遺跡第6地点2号住居跡



江川南遺跡第2号住居跡出土石器



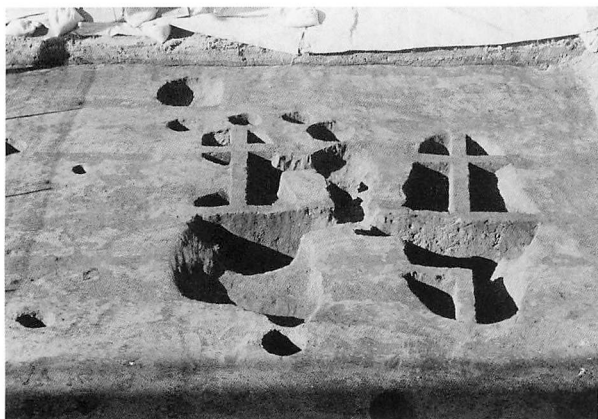
江川南遺跡第16地点試掘調査



江川南遺跡第17地点試掘調査



江川南遺跡第17地点本調査



江川南遺跡第17地点調査区西側ピット群



江川南遺跡第17地点調査区ピット2



江川南遺跡第17地点東側



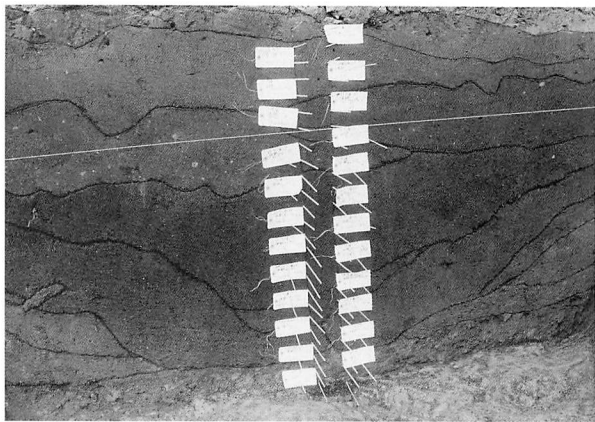
江川南遺跡第17地点溝1・2



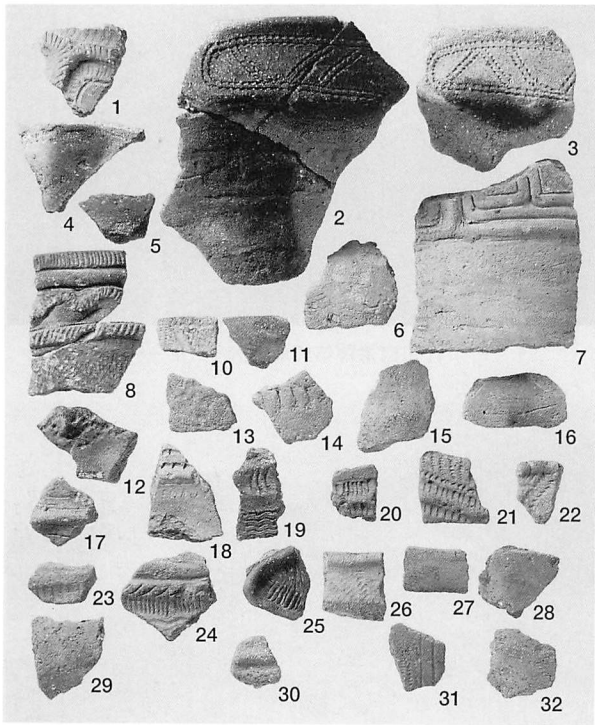
江川南遺跡第17地点堀跡



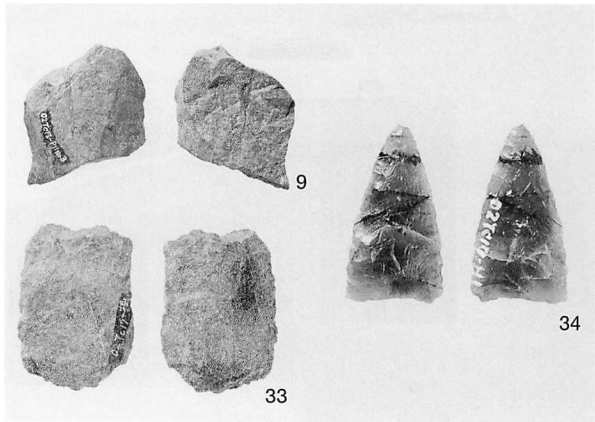
江川南遺跡第17地点堀跡段差



江川南遺跡第17地点溝サンプル採取



江川南遺跡第17地点出土石器



江川南遺跡第17地点出土土器



江川南遺跡第18地点試掘調査



江川南遺跡第19地点試掘調査



江川南遺跡第19地点本調査堀跡

第9章 自然科学分析

—江川南遺跡・亀久保堀跡遺跡における

テフラ分析—

パリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

江川南遺跡および亀久保堀跡遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐ福岡江川の谷頭部から、約300~500mほど下った右岸の標高20~21mのゆるやかに傾斜する台地上に立地する。この台地は、北側と南側の高位段丘に挟まれた大井台と呼ばれる低位段丘であり、貝塚ほか編（2000）では、立川面に対比されている。また、同著により低位段丘を挟む高位の段丘はいずれも武蔵野面のM2面に対比されている。

江川南・亀久保堀跡遺跡は、旧石器時代や縄文時代中期および中・近世の遺構・遺物が確認されている。特に中・近世の遺物では、地蔵院に關係する18世紀前半の陶磁器類が池状遺構から多数出土している。また、近年の発掘調査では、断面形が箱葉研状を呈する堀跡が検出されている。この堀跡は、福岡江川付近から南下し、地蔵院の東約80m付近で南東に向きを変え、約600m以上直線に延びている。堀跡の覆土上部には焼土を多く含む層が所々で確認されているが、遺物の出土はほとんどなく、詳細な時代は不明とされている。なお、この堀の延長線上に神明後遺跡が所在する。

今回の分析調査では、江川南遺跡および亀久保堀跡遺跡において検出された堀跡から採取した土壌を対象にテフラ分析を実施し、堀跡に関わる年代資料を得る。

2 試料

試料は、江川南遺跡第17地点と第19地点および31街区土留工事調査区の3カ所で確認された堀跡の覆土より採取された。検出された堀跡は、上幅2.8m、下幅1.8m、深さ0.8mであり、立川ローム層を掘り込んで作られている。確認された長さは28mで南北方向に延びている。

試料は堀跡断面中央付近の覆土層の上部から堀底直上まで厚さ5cmで連続に採取されている。以下に各地点にて選択した試料を述べる。

（1）江川南遺跡第17地点

覆土層は、上位より1層から19層まで分層されている。1層から3層までは、堀が完全に埋積した後に堆積した土層であり、4層および5層は堀の埋積終了頃の土層、6~8層および15層は堀の覆土の主体部をなす。9~13層は堀の側壁に堆積したブロック状の覆土であり、14層は堀底直上の覆土層である。1~8層および15層は概ね黒ボク土を主体とした土層であり、9~14層はローム層に由来する土壌を多く含む。試料は、3~8層および14層まで試料番号1~24が採取された。各試料の採取層位は、概ね試料番号1~4は3層、試料番号5~7は4層、試料番号8~10は5層、試料番号11~18は6層、試料番号19、20は7層、試料番号21、22は8層、試料番号23、24は14層である。分析には、堀跡埋積終了の頃の4層以下を対象とし、6層を除く4層以下の各層からは1点ずつ（試料番号6・9・19・21・23）、層厚の厚い6層からは4点（試料番号11・13・15・17）の合計9点を選択した。試料番号とその層位については、分析結果を示した表1に併記する。

（2）江川南遺跡第19地点

本地点で記載された覆土層のうち、堀跡の埋積に関連する土層は、上位より8、4、30、29、31、32、33、34、36、40の各層である。これらのうち、8層と4層は、堀が完全に埋積した後に堆積した土層であり、30層は4層と29層の攪乱土、29層から36層は堀の覆土の主体部をなす。40層は堀底直上の覆土層である。40層を除く各層は概ね黒ボク土を主体とした土層であり、40層は黄褐色を呈するソフトローム層に由来する土壌である。さらに40層の下位には暗褐色のローム層が認められている。試料は、8層から40層およびその下位のローム層まで試料番号1~24が採取された。各試料の採取層位は、概ね試料番号1~3は8層、試料番号4は4層、試料番号5は4層および29層、試料番号6~10は29層、試料番号11~14は31層、試料番号15、16は32層、試料番号17は33層、試料番号18は33層および34層、試料番号19は34層、試料番号20~22は36層、試料番号23は40層、試料番号24は暗褐色ローム層である。分析には、8層から40層までを対象

とし、試料番号2～16までの偶数番号の試料8点と試料番号17、19、21、23、24の5点の合計13点を選択した。これは、各層につき1点ずつおよび層厚の厚い29層は3点、やや厚い31層は2点を選択したことになる。試料番号とその層位については、分析結果を示した表2に併記する。

(3) 31街区土留工事調査区

本地点では1層から11層まで分層されている。これらのうち、1層から3層までは、堀が完全に埋積した後に堆積した土層であり、4層以下の層が堀の覆土である。1層から8層は概ね黒ボク土を主体とした土層であり、9層以下は褐色を呈するロームを主体とした土層である。試料は、1層から11層まで（2層を除く）試料番号1～23が採取された。各試料の採取層位は、試料番号1は1層、試料番号2～5は3層、試料番号6、7は4層、試料番号8は5層、試料番号9～11は6層、試料番号12～15は7層、試料番号16、17は8層、試料番号18～20は9層、試料番号21は10層、試料番号22、23は11層である。分析には、2層を除く1層から11層までを対象とし、試料番号1～7までの奇数番号の試料4点と試料番号8～20までの偶数番号の試料7点および試料番号21、22の合計13点を選択した。これは、各層につき1点ずつおよび層厚の厚い3層、7層、9層は2点ずつを選択したことになる。試料番号とその層位については、分析結果を示した表3に併記する。

3 分析方法

試料約20 gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた

繊維束状のものとする。

4 結果

(1) 江川南遺跡第17地点

分析結果を表1に示す。スコリアは試料番号11、13、15に少量、試料番号6、9、17、19、21に微量認められる。スコリアの特徴は、各試料とも、最大径1～2 mm、黒色で発泡不良のスコリア、灰黒で発泡不良のスコリアおよび褐色で発泡やや不良のスコリアが混在する。火山ガラスは、試料番号6から15までには極めて微量、試料番号17以下には微量の無色透明のバブル型が含まれる。軽石は、試料番号6に少量、試料番号9に微量、試料番号11、13に極めて微量含まれるほかは、全く認められない。いずれの試料も軽石の特徴は同様であり、最大径は約1.0 mm、灰褐色を呈し、発泡はやや不良である。斜方輝石の斑晶を包有するものも認められた。

(2) 江川南遺跡第19地点

分析結果を表2に示す。スコリアは試料番号10、12に微量、試料番号8、14、16、17、21に極めて微量認められる。スコリアの特徴は、各試料とも、最大径0.8～1.2 mmであるほかは、色調、発泡度などは同遺跡の第17地点で認められたものと同様である。火山ガラスは、分析した全試料に微量の無色透明のバブル型が含まれる。軽石は、試料番号6に少量、試料番号2、4に微量、試料番号8に極めて微量含まれるほかは、全く認められない。いずれの試料の軽石も、特徴は同遺跡の第17地点と同様である。

(3) 31街区土留工事調査区

分析結果を表3に示す。スコリアは試料番号12に少量、試料番号1、3、14、18に微量、試料番号5、7、8、10、16、20に極めて微量認められる。スコリアの特徴は、各試料とも、最大径1.0～1.5 mmであるほかは、色調、発泡度などは江川南遺跡の各地点で認められたものと同様である。火山ガラスは、試料番号22に少量、試料番号3、8、10、12、18、20、21に微量、試料番号1、5、7、14、16に極めて微量認められる。いずれの試料も無色透明のバブル型である。軽石は、試料番号3、7に少量、試料番号1、5に微量、試料番号8に極めて微量含まれるほかは、全く認められな

第89表 江川南遺跡第17地点のテフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス		軽石			由来するテフラ
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
4	6	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.5	(+)	cl・bw	++	GBr・sb(opx)	1.2	As-B 新期富士テフラ
5	9	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.5	(+)	cl・bw	+	GBr・sb(opx)	1.0	
6	11	++	B・b, GB・b, Br・sb	2.0	(+)	cl・bw	(+)	GBr・sb(opx)	1.0	
	13	++	B・b, GB・b, Br・sb	1.5	(+)	cl・bw	(+)	GBr・sb(opx)	0.8	
	15	++	B・b, GB・b, Br・sb	2.0	(+)	cl・bw	-			
	17	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.2	+	cl・bw	-			
7	19	+	B・b, GB・b, Br・sb	2.0	+	cl・bw	-			
8	21	+	B・b, GB・b, Br・sb	2.0	+	cl・bw	-			
14	23	-			+	cl・bw	-			

凡例 - :含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量.
B:黒色, G:灰色, Br:褐色, GB:灰黒色, GBr:灰褐色, R:赤色, W:白色.
g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm, (opx):斜方輝石斑晶包有.
cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型.

第90表 江川南遺跡第19地点のテフラ分析結果

層名	試料番号	スコリア			火山ガラス		軽石			由来するテフラ
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
8	2	-			+	cl・bw	+	GBr・sb(opx)	1.0	As-B 新期富士テフラ
4	4	-			+	cl・bw	+	GBr・sb(opx)	1.0	
29	6	-			+	cl・bw	++	GBr・sb(opx)	1.0	
	8	(+)	GB・b, Br・sb	0.8	+	cl・bw	(+)	GBr・sb(opx)	0.8	
	10	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	-			
31	12	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.2	+	cl・bw	-			
	14	(+)	GB・b	1.0	+	cl・bw	-			
32	16	(+)	GB・b	0.8	+	cl・bw	-			
33	17	(+)	GB・b	0.8	+	cl・bw	-			
34	19	-			+	cl・bw	-			
36	21	(+)	GB・b, Br・sb	0.8	+	cl・bw	-			
40	23	-			+	cl・bw	-			
ローム	24	-			+	cl・bw	-			

凡例 - :含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量.
B:黒色, G:灰色, Br:褐色, GB:灰黒色, GBr:灰褐色, R:赤色, W:白色.
g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm, (opx):斜方輝石斑晶包有.
cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型.

い。いずれの試料の軽石も、特徴は江川南遺跡各地点と同様である。

5 考察

検出されたテフラの碎屑物のうち、軽石は、その特徴と当社における標準試料との比較から、平安時代の天仁元年（1108年）に浅間火山より噴出した浅間Bテフラ（As-B：新井，1979）に由来する。今回の分析結果では、いずれの地点においても、As-Bの軽石が特に濃集する層位を認めることはできないが、3カ所に共通して堀の覆土層の最上部にやや多く含まれる傾向が窺える。また、その層位よりも下位の堀の覆土層では、軽石は極めて微量か全く認められないことも3カ所で共通する。このことから、いずれの地点においても、堀の覆土層とされた土層の最上部にAs-Bの降灰層準が存在する可能性がある。したがって、

溝の構築時期は、As-B降灰以前である可能性が高い。すなわち現時点で、溝の構築時期は平安時代末の12世紀よりも古い可能性があるといえる。また、As-B降灰時すなわち平安時代末頃には溝はほぼ埋積していた可能性がある。これらの結果は、関連性が考えられている神明後遺跡の堀跡の結果とも、ほぼ整合する。

一方、各地点の堀の覆土層より検出されたスコリアについては、上記のAs-Bとの層位関係から、完新世の富士山のテフラである新期富士テフラに由来すると考えられる。新期富士テフラは、上杉（1990）による記載では、富士黒土層中のS-0から宝永スコリアのS-25まで記載されており、さらにこの中のテフラによっては、細分されているものもあり、50枚近くのテフラにより構成されていることになる。今回の覆土層における産状では、いずれの地点においても堀の覆

第91表 31街区土留工事調査区のテフラ分析結果

層名	試料 番号	スコリア			火山ガラス		軽石			由来する テフラ
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径	
1	1	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.5	(+)	cl・bw	+	GBr・sb(opx)	1.0	As-B
3	3	+	GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	++	GBr・sb(opx)	1.0	
	5	(+)	GB・b, Br・sb	1.5	(+)	cl・bw	+	GBr・sb(opx)	1.0	
4	7	(+)	GB・b, Br・sb	1.0	(+)	cl・bw	++	GBr・sb(opx)	1.0	
5	8	(+)	GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	(+)	GBr・sb(opx)	1.0	
6	10	(+)	GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	-			新期富士 テフラ
7	12	++	B・b, GB・b, Br・sb	1.5	+	cl・bw	-			
	14	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.2	(+)	cl・bw	-			
8	16	(+)	GB・b, Br・sb	1.0	(+)	cl・bw	-			
9	18	+	B・b, GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	-			
	20	(+)	GB・b, Br・sb	1.0	+	cl・bw	-			
10	21	-			+	cl・bw	-			
11	22	-			++	cl・bw	-			

凡例 - :含まれない, (+):きわめて微量, +:微量, ++:少量, +++:中量, ++++:多量.

B:黒色, G:灰色, Br:褐色, GB:灰黒色, GBr:灰褐色, R:赤色, W:白色.

g:良好, sg:やや良好, sb:やや不良, b:不良, 最大粒径はmm, (opx):斜方輝石斑晶包有.

cl:無色透明, br:褐色, bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型.

土層とされた土層の中部付近の層位にやや多い傾向が窺える。このことは、堀の埋積が半ばほど進んだ頃に新期富士テフラのいずれかが降灰した可能性がある。スコリアの特徴からは、そのテフラを特定できないが、As-Bとの層位関係、および小山（1998）によって調査された富士山東麓におけるテフラの産状を参考にとすると、S-24の中で東方へ広域に分布するテフラは平安時代の延暦年間に噴出したテフラ（S-24-7）である可能性がある。この場合、溝の構築年代は、さらに9世紀よりも遡れる可能性がある。

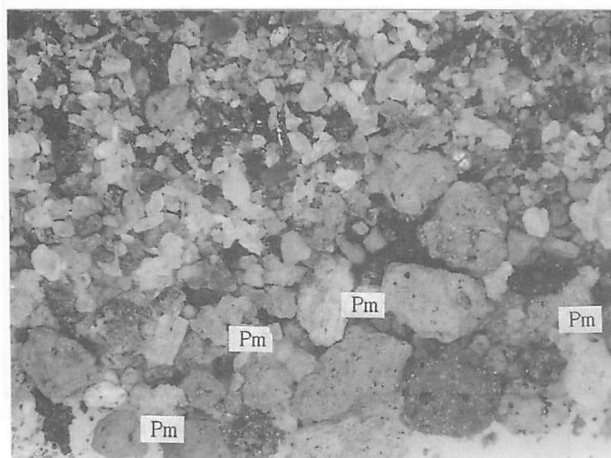
なお、各試料中に認められた微量の火山ガラスは、その形態と周辺事例から、始良Tn火山灰（AT：町田・新井，1976）に由来すると考えられる。ATはローム層中に降灰層準があることから、覆土中の火山ガラスは、溝周囲の土層から溝内に流れ込んだものであろう。

今回の分析により、3カ所の溝覆土においてほぼ同様のテフラの産状が確認され、このことから、溝の構築年代は平安時代9世紀よりも以前である可能性のあることを推定できた。今後周辺における類例の検出と堀の覆土層中の炭化物による放射性炭素年代測定など、他の分析方法も合わせた検討も期待したい。

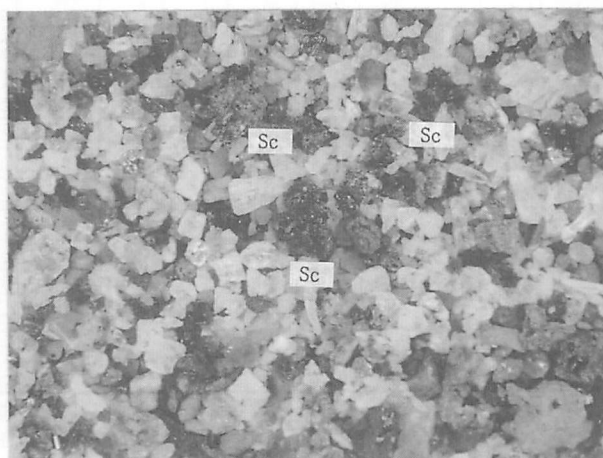
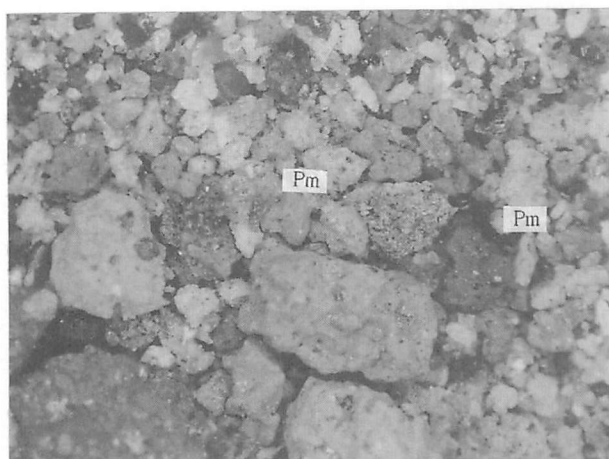
引用文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の指標テフラ層．考古学ジャーナル，157，p.41-52.
- 貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編（2000）日本の地形4 関東・伊豆小笠原．349p.，東京大学出版会.
- 小山真人（1998）噴火堆積物と古記録からみた延暦十九～二十一年（800～802）富士山噴火ー古代東海道は富士山の北麓を通過していたか？ー．火山，43，p.349-371.
- 町田 洋・新井房夫（1976）広域に分布する火山灰ー始良Tn火山灰の発見とその意義ー．科学，46，p.339-347.
- 上杉 陽（1990）富士火山東方地域のテフラ標準柱状図ーその1：S-25～Y-114ー．関東の四紀，16，p.3-28.

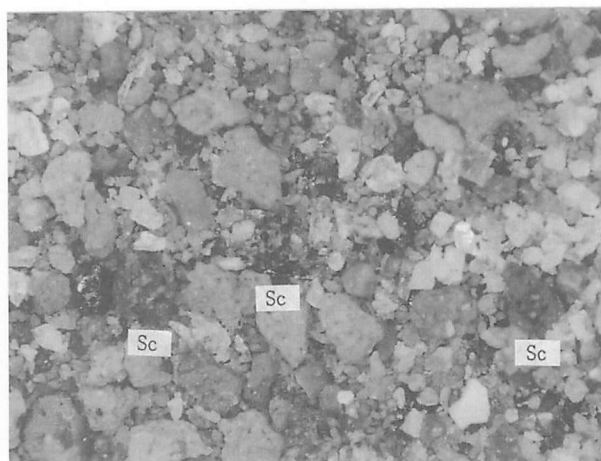
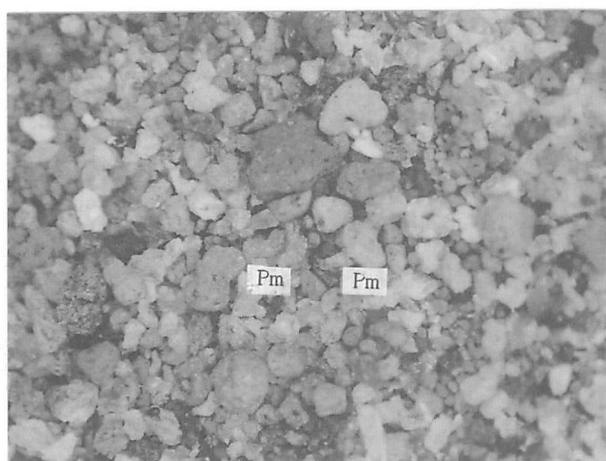
図版1 テフラ



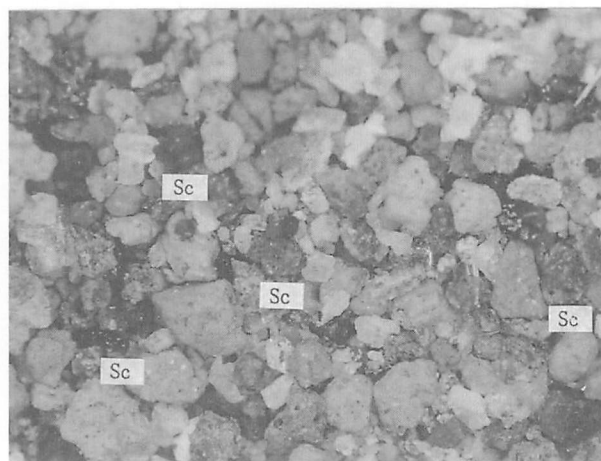
1. As-B の軽石 江川南遺跡第 17 地点 ;6

2. 新期富士テフラのスコリア
江川南遺跡第 17 地点 ;15

3. As-B の軽石 江川南遺跡第 19 地点 ;6

4. 新期富士テフラのスコリア
江川南遺跡第 19 地点 ;12

5. As-B の軽石 亀久保堀跡遺跡第 30 地点 ;7

6. 新期富士テフラのスコリア
亀久保堀跡遺跡第 30 地点 ;12

Pm: 軽石. Sc: スコリア.

2mm